

I. 初めに

1945年4月1日に始まった沖縄戦は周囲約20kmの小さな島「伊江島」にも大きな被害を与えた。4月16日から沖縄における伊江島での地上戦(伊江戦)が始まり、わずか6日後には城山の頂点に米国旗が掲げられた。1945年6月22日に沖縄戦は終結を迎えようとしていたが、伊江島では大きな問題を抱えていた。米軍の土地強制接収被害を受け、食物もお金も無くなっていく中、島民達は米軍と土地を巡る「土地闘争」を展開した。本稿では土地闘争で中心的人物であった阿波根昌鴻著『米軍と農民』を中心に、戦中、戦後の伊江島を振り返り、現在の伊江島が抱える米軍基地問題の解決に向け今後何をすべきなのか、考察していきたい。

II. 研究の目的、動機

本研究においては「土地闘争時代と現代の伊江島を考える」という研究目的となった。「中琉交流史」という講義の課題において県内の史跡を調べるなかで、伊江島を調査対象とした。島内の史跡を調べてみると、「アハシャガマ」は、伊江戦終了の翌日1945年4月22日に150人もの集団死が起こったという事実が探究心が湧いた。「アハシャガマ」を調べる中で伊江戦や、土地闘争の歴史も学び、伊江島の戦中、戦後の歴史について研究テーマとすることにした。

III. 研究方法、地域、期間

本研究は取材、文献調査を中心に約7ヶ月間行った。

現地取材・調査 第1回 8月2日～8月4日

第2回 11月22日～11月25日

IV. 結果

今から約75年前、沖縄では戦争により多くの市民が犠牲となった。米軍は中部(嘉手納)から上陸し、4月16日には伊江島へと上陸してきた。

伊江島は僅か六日で占領され、兵士だけではなく、島民も含め多くの命が犠牲となった。捕虜となった島民は本島の収容所に送られ、帰島したのは2年後の1947年夏頃だった。既に米軍演習地が建設されており、変わり果てた故郷の景色を目の当たりにした。

それでも何とか耕作を始め、ある程度生活基盤を立て直した6年後の1953年3月11日、二度目の戦争と言われる『土地闘争』が始まる。

米軍の演習地拡大のため、大規模かつ強制的な土地接収が始まった。初めの接収は4戸(詳細な広さは不明)で、十分な補償も約束されていた。だが米軍の補償とはわずか移転料二万円、その後、さらに数戸の土地を強制接収し、射撃のための的を描く。当時の農民から土地を奪うことは食料も奪うことになり、さらに住居も奪われた島民は、米軍が準備した幕

舎生活を余儀なくされる。その体験は戦争より辛いとも言われた。

琉球政府・米国民政府へ陳情に行くも問題の解決には至らず、1955年7月から約8ヶ月「乞食行進」と称し、沖縄本島を縦断しながら伊江島の現状を伝えた。

そのころ伊江島では米軍が建てた進入禁止の立て看板を取り除いたり、金網をスクラップとして売るなど子ども達も反対運動に参加し始めた。

だがそんな中、未成年の少年が農耕解禁時間に自信の土地で耕作中、米兵に逮捕・投獄された。

その後も逮捕・投獄は依然として続くものの、阿波根昌鴻著『米軍と農民』によると米軍との闘いが激しかったのは55年から57年であったと述べている。

1959年5月9日 スクラップ拾いの青年二人が爆死

その後も焼き払いや、政府への訴えは続く。

1965年アメリカ、北爆開始、ベトナム戦争へ軍隊出兵。

この頃の伊江島には、凶暴な米兵は減っており、嘉手納から配備される兵士からは伊江島島民には気をつけろと警戒される。立法院・琉球政府へ騒音の訴え。

1970年5月1日 米軍、軍用地の41%解放を発表、軍用地は63%→27.22%へ減少。

だがこの41%は黙認耕作地で、家もあれば、耕作もしている。島民からすると既存の生活になんら変わったことは無かった。

現在、伊江島の約35%を演習場が占めている。

17%が黙認耕作地、18%は米軍演習地(パラシュート降下訓練等に用いられる)。

V. 考察、分析

私自身、基地を無くせば沖縄はもっと豊かになり、安全になり、平和になると自然にそう思っていたが、一概には言えないと痛感した。現に現在の伊江島では基地があつて成り立っている部分も多く、パラシュート降下訓練での基地外着地などもあまり気にしていない人が多い。取材を行った方とは別に、現地の方にもそれとなく基地についての考えを聞いてみたが、複雑な感情で、話したがらなかった。

本土では基地反対の民意が明確に示されており、反対運動も活発である。だが、伊江島ではその声がお金によって消されている。土地譲渡反対を叫ぶ「反戦地主」は島の人口の約1割にまで減少しており、いつ100%になってもおかしくない状況にある。島にはお年寄りが殆どで、島の過疎化や人口減少が続くなか、いつ反戦地主がいなくなってもおかしくない状況にあるといえる。契約地主率100%になると、米軍の新たな施設が増設されてもおかしくないだろう。

VI. 今後の展望

今回の研究で、伊江島の歴史と基地問題を見つめることで「平和」とは何かを改めて考えさせられたような気がした。1970年代からの基地拡大や、接収された地主の生活方法など、

新たに浮き出た疑問も探りつつ、今後は伊江島の土地闘争の歴史を基に政治、経済、あらゆる面から平和について考えてみたいと思った。

VII. 終わりに

今後も研究を継続し、さらに米政府と日本政府と沖縄の米軍基地の関係性について深くほりさげていきたい

VIII. 参考文献、調査協力

VIII. I. 参考文献

阿波根昌鴻著 (2017) 『米軍と農民—沖縄県伊江島』 株式会社岩波書店

阿波根 昌鴻著, C.HAROLD RICKARD 翻訳 (1989) 『THE ISLAND WHERE PEOPLE LIVEA Photo documentary of the troubled land of Iejima,Okinawa islands 』 Christian Conference of Asia

伊江村史 2 編さん委員会編 (2008) 『伊江村史 2 回顧録・概説・論考編伊江島近現代史の諸相~「伊江島史」再構築のために~』伊江村役場

伊江村史編集委員会編 (1980) 『伊江村史 上巻』 伊江村役場

伊江村史編集委員会編 (1980) 『伊江村史 下巻』 伊江村役場

嬉野京子著 (2018) 『戦場が見える島・沖縄—50年間の取材から』 株式会社新日本出版社

榎本恵著 (2000) 『負けて勝つとは 沖縄・伊江島からの手紙』 日本基督教団出版局

沖縄県公文書館公式サイト(<https://www.archives.pref.okinawa.jp/>)

沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科 2003 年度 2 年次平和学実習(石原ゼミ) (2005) 『伊江島平和ガイドマップ解説書』 財団法人わびあいの里

たからしげる、堀切リエ共著 (2018) 『マハトマ・ガンディー/阿波根昌鴻 支配とたたかった人びと』 株式会社大月書店

松岡哲平著 (2019) 『沖縄と核』 株式会社新潮社

『琉球弧の住民運動』復刻版刊行委員会編 (2014) 『琉球弧の住民運動』 合同出版

VIII. II. 調査協力

一般社団法人「わびあいの里」反戦平和資料館ヌチドゥラの家 館長 謝花悦子

社会福祉法人伊江村社会福祉協議会 事務局長 島田勝夫

沖縄大学地域研究所特別研究員 宇根悦子

IX. 指導教員コメント

長い期間をかけて本調査に熱心に取り組んだ。今後の研究に対する意欲のみならず、伊江島闘争に関わる深い理解に、さらなる興味を抱いている。